

# 初級および中、上級における待遇表現教育

—Total Japanese を中心にして—

岡野喜美子

キーワード

待遇表現 待遇意識 理解と表現(使用) 段階的教育内容

## はじめに

近年、コミュニケーション能力の向上に力を注ぐ教科書や教材が増えつつあるのと表裏一体で、待遇表現の教育、あるいは敬語の教育をどう行っていくかに関心の目が注がれることが多くなってきている。いくつかの初級日本語教科書を比較、検討した川口<sup>1)</sup>、ピッツィコーニ<sup>2)</sup>によって、文型中心型の初級教科書では、敬語は終わりの方の課にどっとまとめて出されるとともに、十分に学習者向けに解説されていない傾向があることなどが指摘され、批判されている。このことは、裏返すと、自然な会話を提供して、コミュニケーション能力を高めようとする、敬語、待遇表現的な要素が、初級教科書や初級教材の中でより早い段階から、またより頻繁に扱われざるを得ないことを意味している。その一方で、学習負担の軽減を考慮し、初級日本語教育の中での敬語の扱いを最小限に限定して、中級以降に敬語教育の中心を置くべきだとする主張も決してなくなる<sup>3)</sup>。

1) 参考文献1参照

2) 参考文献2参照

3) 参考文献3中の遠藤織枝氏の発言、参考文献4参照

早大国際部の初級教科書 Total Japanese では、文法や機能を段階づけて取り入れながら、コミュニケーション能力の養成を重視し、その結果として、後に見るように待遇表現を第1課から段階的にかなりの量扱っている。しかし、初級を終わって中級教材(市販のもの)に入るとともに、残念ながら初級からの待遇表現の教育の継続性がほとんど考慮されることなく、待遇表現は場当たりの中途半端な扱いに終わってしまっているのが実状である。

本稿では、初級終了後の待遇表現教育にも視点を定めて、何が初級で学習され、何が中級以降で学習されるべきかについて考え、提案し、今後の教育上の指針としたい。また、各レベルでの待遇表現の学習目標についても触れたい。さらに、待遇表現教育といったときに、とかく狭義の敬語しか論議されないことを踏まえ、この稿では待遇表現の広がりについても言及したい。

## 1. 初級における待遇表現教育のめざすもの——待遇意識

初級では文型さえ習得すればよい、敬語を教えると時間がかかるなどの理由で、基本的な「待遇」に目をつぶって日本語を教えた場合、初級の間に外国人学習者の「日本語の待遇意識」は育たない。これはのちのちまで待遇表現の習得に大きな禍根を残すものと考えられる。初級待遇表現教育の基礎は、外国人学習者に個々の待遇表現を学ばせると同時に、日本人がごく普通に持つ待遇意識を自然にかつ段階的に身につけさせることにある。待遇の意識化が行われなければ、待遇表現の導入は単なる暗記の羅列に終わってしまうことになる。学習者にとって教師、ホームステイ先の親、友人の親などが言語行動上どう待遇されるべきなのか、話す相手や話題の人物について、あるいは場や話題、表現についてどんな配慮がなされるべきなのか、会話を円滑に進めるために日本人がどのようなストラテジーをとるのか、学習者の母語の文化や表現との違いは何なのか、などに徐々に意識が行くようになれば、初級の待遇表現教育の目的はかなり達成さ

れたものと見てよいだろう。

初級の会話指導においては、待遇表現を使う相手などを一般化せず、特定して教えるほうがよいであろう。たとえば、「目上」といっても抽象的な概念を教えるのではなく、日々の生活の中で学習者にとって明らかに目上に当たる人との会話のやりとりを会話例として学習し、学習者の日本語環境に合致した人間関係の中で、そこでの待遇を学んでいくことが待遇意識を高めるうえでもっとも実践的かつ効果的であると考えられる。実際の教科書で見てみよう。

## 2. Total Japanese での導入の実際

以下は、初級教科書 Total Japanese (40 課) の解説書(文法ノートあるいは会話ノート)で取り上げられている待遇にかかわる項目である。これらのあるものは敬語であり、またあるものは聞き手ないしは話題の人物に対する配慮、気配りから来る丁寧表現などであり、また、会話のやりとりの潤滑油となるものなどである。

本稿では、紙数の関係で、これらがどういう文脈の中に現れたものであるか、どう解説されているかなどの多くは省いたが、解説書の中では会話を行う 2 人(3 人)の人間関係をきちんと押さえたうえで、そこで使われた待遇表現が説明されている。日本語学習者である「自分」と話す「相手」や「話題の人物」との関係によって、敬意のはらい方、丁寧度が異なることなどが具体的に繰り返し解説されている。前述したように、学習者が日常的に出会うはずの教師、ホームステイ先の親、友人、通りすがりの人、店員、事務所の職員などとの円滑な会話を可能にさせる待遇表現の学習とともに、「待遇意識」を高めることを大きな目標としているのが特徴である。

### 1) 待遇表現教育のポイント

この教科書では、大きく分けて次のような点に留意して待遇表現を取り上げ、解説したり学習指導したりしている。

- ・学習者にとって目上とはだれかについての(第1課での)指摘
- ・目上(教師, 上司, ホームステイ先の親, 友人の親, 先輩), 目下(弟妹, 子ども, 後輩), 同輩に対する待遇についての解説
- ・付き合いの中で待遇が変化していく関係とほとんど変化しない関係についての指摘
- ・目上に配慮した表現の選択
- ・ウチの解説
- ・相手に配慮したやわらげ表現などの選択
- ・丁寧度, 改まりなどに関する解説
- ・会話を円滑に行うためのあいづちなどの学習
- ・挨拶, 決まり言葉などの使い方の学習
- ・用件の切り出し方, 前置き(依頼表現, 許可求め表現などにおける)の学習
- ・店員による敬語など, 理解中心の敬語の早い時期での導入
- ・敬語に関する解説の分散(16課にわたって導入)
- ・既習の敬語を整理し, 最後にまとめとして解説
- ・スピーチスタイルの選択に関する解説と導入

デス・マス体, くだけた話体(ダ体)のスピーチスタイルに関しては, かなりの頻度と量で解説がなされているが, 別稿<sup>4)</sup>で取り上げたので, 本稿の次項の一覧には載せなかった。が, 聞き手への待遇表現という点からは本来ここに取り上げるべき重要なものであることは指摘しておきたい。

以上のポイントを踏まえて, 次に個別の待遇表現のリストを見てみる。

## 2) 各課において解説された待遇表現(スピーチスタイルを除く)

ここには, 第1課から待遇表現がいくつも取り上げられ, 他のほとんどの課でもさまざまな待遇表現が扱われており, 最後の方の課の第38課になると敬語のまとめが解説されている, という待遇表現の扱いの全体像

---

4) 参考文献6参照

が示されている。また、何が待遇表現として取り上げられたかも一覧できる。

1 課	応答詞(改まり)	「ええ / いえ」対「はい / いいえ」
	呼称(改まり)	「ぼく / わたし / あたし / わたくし」(男女による違い)
	呼称	「あなた」の使用上の制約(目上に使えず。 「～さん」「先生 / ～先生」)
	呼称	「彼 / 彼女」の使用上の制約(「～さん、～先生」を使う)
	呼称	教室やオフィスでは名字を使う
	呼びかけ	「～さん、～先生、先生、お父さん、お母さん」
	挨拶	「はじめまして」「どうぞよろしくお願ひします」
	敬意	「アメリカ人」対「アメリカの方」
	切り出し	「あのう」(ためらい)
2 課	終助詞	「よ」(目上には注意)
	決まり言葉	「いただきます / いえ、けっこうです」 「こちそうさまでした」
3 課	挨拶	「お休みなさい」
	呼称	「～君」
4 課	終助詞	「ね」「ねえ」
5 課	やわらげ	「何時間ぐらい、何時ごろ」
6 課	誘い	「～ませんか」「～ましょう」
	ゆだね	「よかったら(～ませんか)」「(映画)でも(見に行きませんか)」
	やわらげ	「今日はちょっと…」(断り)
	切り出し	「すみません」対「ちょっと」

7 課	店員の敬語 (含む挨拶)	「いらっしゃいませ、こちら / そちら / あ ちら / どちら、～でございます、はい、 どうぞ、はい、いかがですか、少々お待ち ください、お待たせしました、どうも ありがとうございました」
	挨拶(客)	沈黙か「どうも」(店員の感謝のことばに 対して)
	切り出し	「(あのう,)すみません / お願いします」 (店員に)
	挨拶	「どうぞ」対「お願いします」
	依頼(決まり言葉)	「～をください」
	依頼(決まり言葉)	「～を見せてください」
8 課	前置き	「～へ行きたいんですけど」(唐突さを避け る)
	挨拶(感謝)	「(どうも)ありがとうございます、(どう も)すみません、どうも」「いいえ」
9 課	店員の敬語	「ご注文は?」「お飲み物は?」「～と～と、 どちらになさいますか」「ホットでござい ますね」
11 課	命令	「挨拶しなさい」(子どもに)
	敬語(説明)	目上(教師, 上司, ホストペアレント, 友 人の両親など)に対する尊敬, 敬意, 礼儀 を示す
	尊敬語	「いらっしゃいます(=います)」「お宅」 「この方」
	(謙讓語)	(解説のみ)
	(丁寧語)	(解説のみ)
	親族呼称	「父 / お父さん, 両親 / ご両親…」

	尊敬の接頭語	「ご～」「お～」
12 課	丁寧の接頭語	「お休み, お天気」
	やわらげ	「あ(ん)まり, ちょっと」
13 課	丁寧な指示	「～てください」(依頼との違い)
	丁寧な依頼	「～てもらえませんか」
14 課	尊敬語	「～ていらっしゃいます」
	訪問上の	「いらっしゃい, どうぞお上がりくださ
	決まり言葉	い, おじゃまします, こちらへどうぞ,
	(挨拶)	そろそろ失礼します, おじゃましました,
		気をつけて」
	勧誘	「(遊びに来)てください」
15 課	電話会話	
	尊敬語	「お帰りになります」「どちらさまですか」
	謙譲語 <sup>5)</sup>	「～と申します」
	丁寧な名乗り	「～でございます」
	決まり言葉	「～さん, 願います」「ちょっと / 少
		々お待ちください」
	挨拶	「失礼します」「ごめんください」「失礼し
		ました」
	言いさし(1)	「...けど / が」
	あいづち	「はい, ええ, そうですね, そうですか,
		そう?, へえ」
16 課	丁寧な指示	「(忘れ)ないでください」
	挨拶(謝罪)	「すみません(でした)」「失礼しました」
		「ごめんなさい」「ごめん」
17 課	敬語(1)	敬語動詞についての解説

5) Total Japanese では電話での名乗りを「謙譲語」としたが、「丁寧語」を含む「いわゆる謙譲語」である。

	尊敬語	「なさる」「いらっしゃる(=行く, 来る)」
	謙讓語	「申す」
	改まり	「いかがですか」
18 課	前置き(許可求め)	「あのう, ちょっとうちに電話したいんですけど, (電話使ってもいいですか)」
	許可求め	「使ってもいいですか」「ここ, いいですか」
	丁寧な断り	「すみません。来るんです」「あ, 今使うんですけど」
19 課	丁寧な依頼	「～ていただけませんか」「～ていただけないでしょうか」
	切り出し	「今ちょっとよろしいでしょうか」「ちょっとお願いがあるんですが, …」
	前置き(依頼)	「あした文楽を見に行くんですけど, …」
	助言	「～たほうがいいですね / よ / と思います(けど) / でしょうね」
	改まり	「よろしいでしょうか」
20 課	挨拶(目下へ)	「(どうも)ありがとう」
21 課	言いさし(2)	「忙しくて…」「今ちょっとレポートを書いているんで…」
	決まり言葉	「どうぞよろしくお願いします」
22 課	目上への配慮(欲求)	「ほしい」「～たい」の制約的用法(「いいですね / お願いします / いただきます」の使用)
	やわらげ	「今は(けっこう)です」
24 課	授受動詞	「あげる, さしあげる」「くれる, くださる」「やる」「もらう, いただく」



	丁寧度	「くれますか」対「もらえますか」 「もらえますか、もらえませんか、もらえないでしょうか、いただけますか、いただけませんか、いただけないでしょうか」
25 課	授受動詞 (恩恵表現)	「～てあげる、～てさしあげる」「～てくれる、～てくださる」「～てやる」「～てもらう、～ていただく」
	目上への配慮	「～てあげましょうか」「～てさしあげましょうか」の制約的用法
27 課	敬語(2) 謙譲形 謙譲語 切り出し	「お～する」「ごNする」 「うかがう」(＝訪問する) 「ちょっとお話ししたいことがあるんですが、...」「ちょっとご相談したいことがあるんですが、...」など(謙譲形の学習はこの切り出しのため)
28 課	尊敬語	「おっしゃる」
30 課	配慮 配慮 やわらげ (考えを述べる)	「～つもりですか」ではなく「～ますか」 「～つもりです」の制約的用法(「～うと思っています」「～たいと思っています」) 「～んじゃないですか、～んじゃないでしょうか」(「～と思います(けど)」より丁寧)
	言いさし(3)	「(きつい)し...」「～んですけど...」
31 課	切り出し (事情説明)	「～んですけど/～たいんですけど、(どうしたらいいですか)」
32 課	切り出し	「あのう、ちょっとうかがいますが」「～へ行きたいんですけど」など

33 課 敬語(3)

尊敬形	「お~になる」「ご~なさる」
婉曲	「~ことになる」のほうが「~ことにす る」より丁寧な例
決まり言葉(感謝)	「おかげさまで」「いい勉強になりました」

36 課 敬語(4)

尊敬(命令)	「お/ご~ください」
謙讓(依頼)	「お/ご~いただけますか」
謙讓	「~ております」「(ウチ)
切り出し	「申し訳ありませんが」「悪いんですけど」
決まり言葉	「承知しました」「けっこうです」
決まり言葉	「失礼ですが」(名を聞く)
謙讓	身内には「~さん」をつけない(ウチ)

38 課 強制と恩恵

強制	「~させる」と「~てもらう」
恩恵(謙讓)	「~させてもらう/させていただく」
許可	「~させていただけますか」「~させてい ただきたいんですが」

敬語(5)まとめ

1. 尊敬語 (1) 動詞「いらっしゃる, なさる, おっしゃる,  
くださる」など  
(2) 形「お~になる, ご/お~なさる」  
(3) 命令「お~ください, ご~ください」  
(4) 接頭語・接尾語「ご~, お~, ~さん, ~  
の方」  
(5) 「~ていらっしゃる」  
(6) 「~でいらっしゃる」
2. 謙讓語 (1) 動詞「おる, まいる, いたす, うかがう,  
お目にかかる」など

- (2) 形「お～する, ご / お～する」
- (3) 依頼「お～いただけますか, ご / お～いただけますか」
- (4) 「～ております」
- (5) 「～でございます」

3. 丁寧語<sup>6)</sup>
- (1) 美化語「おはし, お水」
  - (2) 「こちら, どちら」(店員の言葉)
  - (3) 「N/NA でございます」(店員の言葉)
  - (4) 「ございます, まいります, ～ております」  
(公共のアナウンスなど)
  - (5) 「～でして, ～でしたら, ～まして, ～ましたら, ～ますと」

丁寧さ	間接表現, あいまい表現
決まり言葉	「お忙しいところ申し訳ありません」
遠慮(1)	「～ていただけないかと思って」
39 課 遠慮(2)	「～ていただけるといいんですけど / ～てもらえるといいんですけど / ～とありがたいんですけど」

Total Japanese は初級の教科書であり, これだけの待遇表現が初級で学習しきれるかという疑問もあるかもしれない。これについては, 中級以降の待遇表現教育とからめながら次項で答えることとする。

### 3. 中級以降における待遇表現教育——初級との関連

初級における待遇表現の教育は, 学習者の体験や日本語環境の範囲内に

---

6) Total Japanese での「丁寧語」は, 一般に行われている「尊敬語, 謙譲語, 丁寧語」の3分類には従っていない。「デス・マス体」は「ダ体」とともにスピーチレベルとして扱い, 「丁寧語」は Refined expressions として丁寧語, 美化語を指している。

限るのがよいことは前に述べたが、待遇表現のうち敬語に限って言えば、初級ではそのかなりの部分は理解中心の学習であってよいであろう。非常に基本的な「いらっしゃる」「おっしゃる」「なさる」「お～になる」や呼称、授受(恩恵)表現、依頼表現などの敬語表現は理解することも表現(使用)することも初級で要求されて当然であるが、それ以外の初級の敬語の多くは理解学習が中心になり、やがて中級において表現(使用)できるよう要求されることになるのがよい。つまり、中級の敬語教育の中核をなすのは初級で主に理解のために導入された敬語の運用力をつけることにあると言える。この点、敬語を除く他の待遇表現が初級で導入された場合、ここでは理解も表現(使用)もほとんどともに要求されるのと異なる扱いを受けることになる。なぜこのように敬語と他の待遇表現を分けて考えるのかというと、敬語は積極的に敬意や丁寧度を加えていく点で特に誤用や濫用のおそれのあるものであり、十分理解されたあとで使用されることが望ましいからである。

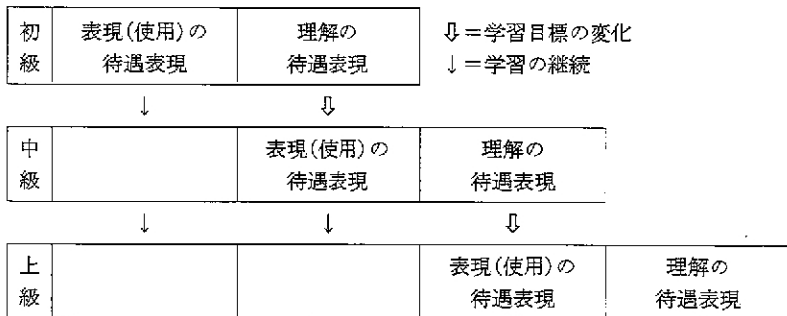
このため、初級にせよ中級にせよ、敬語の教育は「理解」と「表現(使用)」の2つの面に分けて行われるとよいであろう。学習の負担を心配して、初級から謙讓語を全て、あるいはほとんど取り除いて教えるというのは、学習者が日本での日常生活の中で耳にする日本語の理解という点からは、現実性、実用性に乏しい考え方であると言わねばなるまい。学習者が実際に口にしなくとも、さまざまな場面で学習者は尊敬表現や謙讓表現に取り囲まれているのであり、これらの理解の集積が次の段階でのより高度な待遇意識を育てていくのである。この点からも、「理解」できれば十分なものと「表現(使用)」できるように指導していくものという観点を取り入れれば、初級から中、上級へと進んでいく待遇表現教育はそれほど重い負担もなく行われるはずである。

日本国内での日本語教育において、ちょうど普通体(ダ体、くだけた話体)の理解が敬体(デス・マス体)中心の初級段階でも不可欠であると考えられるようになってきたことが象徴するように、コミュニケーション能力

の向上を目的とする会話教育からは、敬語の理解学習もまた、初級で軽視するわけにはいかなくなっている。むしろ、初級で、敬語表現を耳にし、理解し、慣れることによって、次の段階——すなわち、中級——での表現(使用)の基礎づくりをするという積極的な意味が出てくることを評価すべきである。初級であるからといって待遇を考えないで行う日本語学習には、日常的に耳にする教室外での日本語への無関心、無理解を助長するおそれが多分にあることを忘れてはなるまい。

Total Japanese に話をもどすと、その第 38 課における敬語および解説(まとめ)はここですべてを学習するというのではなく、この課までに扱ったものについては整理のためであり、ここではじめて導入される敬語については必ずしも表現(使用)を目標としなくてよいものである(例: ご覧になる、いたす)。これらは学習者が実際に会える公共の場でのアナウンスやサービス業場面、テレビ番組などを通して、理解できるようになれば十分である。ただ、注意しなくてはならないのは、中級においてそれらが既習のものとしてないがしろにされてはならず、ロールプレイ、スキットなどによって表現(使用)中心で習得できるようにしっかりと指導されるべき点である。中級、上級間においても同様の理解と表現(使用)のスパイラ

待遇表現の「理解」と「表現(使用)」



7) 参考文献 3 中の熊井浩子氏の発言

ルなつながり<sup>8)</sup>が望まれる。すなわち理解中心で導入されたものが次の段階では表現(使用)されるものとしてくりかえし指導されるのである。その関係を簡単に図示すると前頁のようになる。

こうして、理解された待遇表現、特に敬語は、次の段階では必ず表現(使用)を目的として学習され、さらに新たに導入された理解のための待遇表現がその次の段階で表現(使用)中心に学習されるという連続性、継続性をもつことによって、待遇表現教育の段階性は構築されていくのである。

この考えに基づいて、初級(Total Japanese)と中級、上級の「理解」項目と「表現(使用)」項目の具体案を下に示す。初級においては、敬語はかなり厳正に表現(使用)と理解に分け、広義の待遇表現にあたるものは、早くからコミュニケーション能力をつけるために、一応すべて表現(使用)

	表 現(使用)	理 解
初	尊敬語 / 形(イラッシャル, ナサル, オッシャル, オ～ニナル, ゴ～ナサル, ～テイラッシャル, ゴ/オ～) 謙讓語(ウカガウ, オ / ゴ～スル) 授受動詞 恩恵表現 呼称, 親族呼称 応答詞 終助詞 切り出し(オ～シタイコトガアルデスガなど) 前置き(今チョットヨロシイデスカなど) 挨拶, 決まり言葉 やわらげ, ゆだね, 間接表現, あいまい表現 あいづち 言いさし	尊敬語 / 形(オ / ゴ～クダサイ, オイデニナル, ゴ覧ニナル, 召シ上ガル) 謙讓語 / 形 <sup>9)</sup> (オ目ニカカル, 拝見スル, イタダク(飲食), ～サセテモラウ, ～サセテイタダク/ 申ス, オル, 参ル, イタス, ～デゴザイマス/ ～テオリマス, オ / ゴ～イタダケマスカ) 許可求め(～サセテイタダケマスカ) 丁寧語 <sup>9)</sup> (～デシテ, ～デシタラ, ～マシテ, ～マシタラ, ～マス/ ゴザイマス, マイリマス, ～デゴザイマス, ～テオリマス) 遠慮 くだけた話体(ダ体の基本)

8) 参考文献2 参照

9) Total Japanese では「謙讓語」をやや広く解釈し、「謙讓語」のほかいわゆる「丁重語」「丁重謙讓語」を含む。また丁重語的なものや美化語は別に Refined expressions「丁寧語」として導入した。

級	<p>丁寧(指示, 依頼, 断り)          配慮(～タイ, ホシイ, ～テアゲマシ          ヲウカ, ～ツモリデスカなど)          誘い, 依頼, 許可求め, 助言, 申し出          電話表現(～ト申シマス, ～デイラッ          シヤル, ～デゴザイマス)          デス・マス体</p>	
中級	<p>尊敬形(～レル, ～ラレル)          切り出し          前置き          配慮(ほめ, へりくだり, 文句など)          挨拶(お礼, お詫びなど)          決まり言葉          間接表現, あいまい表現          漢語, 改まり語</p>	<p>尊敬形(オ～デス, オ / ゴ～ノ, オ～          クダサル)          謙譲語(存ジ上ゲテイマス, 申シ上ゲ          マス,          頂戴シマスなど)          丁重体(参リマス, イタシマス, ～テ          オリマス, ～ト存ジマス)          挨拶(恐レ入りマス, カシコマリマシ          タなど)          決まり言葉          間接表現, あいまい表現          漢語, 改まり語(拝借シマス, オ求メ          クダサイなど)          くだけた話体(ダ体の発展1)          (何見テンノ, 分カンナイ, ～ツケな          だ)</p>
上級	<p>漢語, 改まり語          切り出し          前置き          決まり言葉          間接表現, あいまい表現          複雑な待遇上のストラテジー</p>	<p>特殊な敬語(改まり度の高いもの)          軽率語          やや古めかしい敬語          くだけた話体(ダ体の発展2)          (～カモ(ネ), ヤッパ          超ウマイ, スゴイオイシイ          オレ, オマエ, アンタ, コイツ /          ソイツ / アイツ / ドイツ          ～サ, ～ズ, ～ゼ, ～カヨ, ～カイ          スゲエ, ウメエ, 知ラネエ, ～ッ          テバなど)</p>

を目的として分類した。なお、ここには、スピーチスタイルも含めた。

中級の場合は、いわゆる中級会話の中に待遇表現を入れて、その運用力をはかる。特に待遇表現の時間を設ける必要はなく、普通の会話の中にさまざまな人間関係や初級でも扱った用件などを取り入れて初級より高度な練習をするのがよいであろう。また、作文指導では、手紙文やスピーチの原稿作成の際に意識的に待遇表現を取り入れるとよいであろう。

上級の場合は、もし可能なら、待遇表現のみを学ぶ時間を設け、表現練習の場として次のような場を設けることを提案する。

- ・発表(正式の発表), スピーチ
- ・ビジネス会話(初対面の人, 顧客, 上司, 同僚との会話, 電話会話など)
- ・一般会話
- ・手紙文(個人的な手紙, ビジネスレター)のやりとり

発表やスピーチにはそれぞれ特有の敬語, 決まり言葉, 漢語, 改まり語などがあり, ビジネス会話にも特有の敬語, 挨拶, 決まり言葉, 間接表現, 漢語, 改まり語などがあるので, これらを学習する。一般の会話はさまざまな待遇表現を組み合わせたリストラテジーを駆使したりできるように, 異なる人間関係の中での諸表現をロールプレイやスキット, シミュレーションで学習する。ビジター・アクティビティ<sup>10)</sup>ができれば更によい。生のドラマなどに出てくる非常にくだけた話体, 軽卑語的なもの, おとしめ, 冗談, からかいなどの待遇表現は, 上級ではじめて理解できればよいものとして扱うとよいであろう。また, 手紙文には, 手紙文らしい敬語, 挨拶, 決まり言葉, 前置き, 切り出し, 改まり語などがあり, 初級, 中級で学習した手紙文にこれらを加えて待遇表現を使用させる。特に手紙文は, 会話と同様, 相手がだれであるか, 用件が依頼であるか, 催促であるか, あるいは礼状, 挨拶状であるかなどによって, 多様な型の練習が必要となろう。その一方で, 講演, 講義, 討論会, ドラマ(待遇表現を多く含む)などの(視)聴解, 手紙の読解, 近代文学作品などにおけるやや古めかしい敬語などの理解学習を行うことも必要となろう。

#### 4. 待遇表現の広がり——研究と教育

待遇表現というとき, 敬語のこととのみ結びつけてしまわれがちである

---

10) 参考文献 5 参照



が、そうであってはならない。敬語の研究と教育はそれ自体大きな課題であるが、待遇表現の研究と教育としてはそれだけでは十分でなく、円滑なコミュニケーションを行うためにとる日本人的な言語行動の研究と教育として広くとらえる必要がある。教育の面だけをとっても、いい人間関係を生み出すために日本文化の中でどう気配りをし、どう表現していくかの実践的、具体的な学習が待遇表現教育のかなりの部分を占めることをまず認識すべきであろう。そのうえで、初級、中級、上級を問わず、敬語とともに前置きや話の切り出し方、潤滑油としてのあいづち、挨拶、決まり言葉、相手への配慮としての間接表現、やわらげ表現など広義の待遇表現を扱っていかなければならない。

また、学習者の待遇表現上の誤用や非用は単に正す(あるいは指摘する)ことでよしとしてはなるまい。その誤用や非用を起こした待遇表現の教育の内容や方法を反省し研究して次の教育に生かしていくと同時に、その誤用、非用のより根本的な成因、つまり学習者の母語の干渉からくる言語行動、母語文化との相違点、類似点を明らかにする研究が更に進められなければならない。

## 5. 終わりに

中級以降での待遇表現については、一般にまだ初級における待遇表現ほどに、何をどう扱うかが論ぜられてもいないし、研究も進んでいないと言えよう。敬語だけではなく、広義の待遇表現の何が中級、上級で教育されるべきかについて本稿では仮説的に提案したが、今後は実際の教育の中で一層具体的に待遇表現項目を取り上げ、待遇表現の全体像をかたちづくっていく一方で、中級、上級での待遇表現教育の目指すところをより明らかにしていきたいと思う。

### 【参考文献】

1. 川口義一 (1987) 「日本語初級教科書における敬語の扱われかた」『日本語教

育』61号

2. バルバラ・ピッツィコーニ (1997) 「待遇表現から見た日本語教科書——初級教科書五種の分析と批判——」くろしお出版
3. 遠藤織枝, 菊地康人, 熊井浩子 (1990) 「座談会 敬語をどう教えるべきか——日本語教育のなかの敬語——」『月刊日本語』5月号
4. J. V. ネウストプニー (1978) 「POLITENESS と日本語教育」『日本語教育』35号
5. J. V. ネウストプニー (1995) 「新しい日本語教育のために」大修館
6. 岡野喜美子 (1998) 「初級におけるスピーチスタイルの指導」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』11
7. Osamu Mizutani and Nobuko Mizutani (1987) *HOW TO BE POLITE IN JAPANESE*, The Japan Times
8. 三牧陽子 (1991) 「待遇表現の体系的把握——日本語教育の視点から——」『日本語教育論集』吉田弥寿夫監修, 学研
9. 足立祐子 (1991) 「待遇表現と日本語教育」『日本語教育論集』吉田弥寿夫監修, 学研
10. Brown, P. and Levinson, S. C. (1987) *Politeness. Some Universals in Language Usage*, Cambridge University Press